研究ノート　　ソルブ語について

三谷惠子

本稿はH. Faßke "Sorbische Sprache" (Die Sorben in Deutschland, Maćica Serbska 1991, pp27-33)の訳並びに注からなる。本稿の目的は、ソルブ語の歴史と現状を掴み、またソルブ語に関しどういった問題があり、それらがどのように論じられてきたかを概観することにある。このテクストを選んだのは、ソルブ語の歴史と現状をコンパクトにまとめてあり、これを一読することによってソルブ語のアウトラインを把握することができると考えたからである。著者はソルブ語の研究では第一人者のHelmut Faßke博士、Sorbischer Sprachatlasの編集を始め数多くの言語学的研究がある。さらに本稿では、この中で述べられている重要な点に関し、これまでの研究を参照しつつ補注を加えた。これらの問題の一つ一つは、ソルブ語のみならずスラヴ諸語の成立や構造を考えるうえでも重要なテーマを与えてくれるものと思われる。

なお、本文中、肩付き番号の注は用語や固有名詞に関する短い説明（脚注）とし、内容に関する補注は[1]として本文末にまとめた。また、地名や人名は基本的にその国式の表記で示し、ソルブ関係のものは原則としてドイツ語式、必要に応じてソルブ語の表記をBautzen/Budyšinのように併記した。地名、位置関係については本稿末に掲げた地図1-2を参照されたい。

略号：hs.上ソルブ語 (hornjoserbšćina); ds.下ソルブ語(delnjoserbšćina); pol.ポーランド語; polab.ポラブ語; s-cr.セルビア・クロアチア語

「ソルブ語」

ヘルムート・ファスケ

ソルブ語はスラブ語に属し、特にポーランド語、カシューブ語、チェコ語、スロヴァキア語と関係の深い言語である。これら並びに消滅したポメラニア語グループ（スロヴィンツなど）、ポラブ語（ドラヴァ・ポラブ）などと共に西スラヴ語族を形成する[1]。西スラヴ諸語に共通の特徴は、例えば印欧語の*ktが、cに発展した(cf. Lat. noktis, w.sl. noc)点で、南スラブのšt(bъl. nošt), 東スラブのč(rus. ночь)と対比される[2]。

ソルブ語はかつては東はブーブル川(Bóbr)～クワイセ川(Queiße/Kwisa)、西はザーレ川(Saale/Solawa)、南はエルツ-ラウジッツ山地、北はフランクフルト・アン・デア・オーデル、ケペニク(Köpenik/Kopjenik)からユテルボーク(Jöterbog/Jotrobog)、バービィ・アン・デア・エルベ(Barby an der Elbe)を結ぶ線の範囲に渡って話されていたが、今日では上、下ラウジッツLausitz/Łužica、即ちかつてのミルチャン族、ウジチャン族の居住地においてのみ使用されている[3]。古ソルブ部族[1]の10世紀における政治的自立の喪失、それに続く古ソルブ族の居住地へのフランク、チューリンゲ

1 Altsorbische Stämme. altsorbischは現在のソルブ人(Sorb/Serb)につながる、スラブ分裂時代以後のソルブ部族集団を指す言葉として用いられる。本稿では古ソルブと訳した。その由来、他のスラヴ語族や現在のラウジッツのソルブとの関係については補注1-3.

ン、ザクセンの諸族の農民階級の移住、ドイツ諸領の形成とそれに伴う通商、交通の形成、また既に13世紀に制度として導入されたソルブ語の使用禁止などによって、ソルブ語使用地域は絶えず狭められ、ラウジッツ地方以外のソルブ語の使用は圧迫された[4]。しかしソルブ語は、地名やいくつかの残存語として名残をとどめている（例えばGera<'gora', Leipzig<sor. Lipsk<lipa）。民衆の言葉で教会の教えを広めることを要求した宗教改革はまた、書かれたソルブ語の使用を広めたが、この時期においてもソルブ語のコンパクトな使用領域は、北東はブーブル川流域からクロッセン(Krossen/Krosno)近くまで、北はプライスケ、北シュプレーボーゲン（フュルステンヴァルデ）、西はヌーテ(Nuthe), エルベ河畔に位置するリーサ(Riesa die Elbe)に及んでいた[2]。現在のソルブ語使用域は、上ラウジッツのヴァイスヴァッサー(Weißwasser/Běła Woda)、ホイェルスヴェルダ(Hoyerswerda/Wojerecy)、バウツェン(Bautzen/Budyšin)の各郡、また、ゼンフテンベルク(Senftenberg)、カメンツ(Kamenz/Kamjenz), ビショフスヴェルダ(Bischofswerda)、レーバウ(Löbau/Lubij)、ニエスキ(Niesky/Niska)の各郡中の、上記郡に隣接する地域、また下ラウジッツのコトブス(Cottbus/Chośebuz)、シュプレンベルク(Sprenberg/Grodk)両郡と、これに接続するリュッベン(Lübben/Lubin)、カラウ(Calau/Kalawa)、フォルスト(Forst/Baršć)、グーベン(Guben/Gubin)の郡の中の地域となる。これらの地方でソルブ語の能力を持つ者の人口は約7万である[5]。

ソルブ語使用地域が複数の政治的領域に分割されたこと（上、および下ラウジッツ辺境伯領、ザクセンおよびブランデンブルク選定侯国、マグデブルク司教区、ザガン侯区）、また社会的、文化的中心地がなかったことから、宗教改革以後、書かれたソルブ語の使用が始まって以来、異なる方言を基盤として様々な文章語[3]の形式が生まれた。その中から、19世紀中期までに最終的に、地域間の差異を越えた共通の規範となる二つの文章語が形成された。その一つはバウツェン方言を基にした上ソルブ文章語であり、今一つはコトブス方言を基にした下ソルブ文章語であった[6]。両ソルブ文章語とその規範の発展は、ソルブの言語文化遺産の中に追跡することができる。それらは、その発生時点における言語状況を反映しており、そ

2 このほか、１６世紀頃までヴィッテンベルク, ムルデ川のアイレンブルク周辺にもソルブ語の島があった。ルターもヴィッテンベルク周辺の状況について「このヴェントラントWendlandは純粋にスラヴ人の地域である」と述べている（Sołta 1976:36）

3 Schriftsprache, spisowna rěč. 標準語または文章語。標準語、あるいは文章語は、方言の局所性に対し、言語使用者の共通の通信手段という社会的機能、また、統一化された正字・正書法と文法を備えた規範言語の性格において特徴付けられる。この二つの用語は概念上重なるが、標準語が社会制度という面から特徴付けられるのに対し、文章語は場合によって、標準語が制度化される以前の書記形式―そこから標準語の規範が形成されていくような、文学作品や宗教文献に見られる言語―を指す、と区別して考えたい。原文では一貫してSchriftsprachеであるが、本稿では成立の過程の中での規範言語は文章語、今日的な意味での、制度化された規範言語は標準語と訳し分けた。

れによって言語の発展を再構成することを可能にしている。こうした、比較的均質な文章語の規範成立以前に、発生の場所の方言を基礎として書かれた言語文化遺産がソルブ語において特に重要な価値をもつのは、多くの場合それらが、現在ではドイツ化された地域のソルブ方言の様々なタイプを示しているからである。

ソルブ語による書かれたテクストは、16世紀の宗教改革と共に、宗教文献の翻訳として生まれた。ソルブ語の歴史の中で特筆すべき言語遺産は、1543年ツォッセンで書かれた礼拝式序Agenda、1548年のラウブニッツのヤクビツァによる新約聖書訳[4]、あるいはまた同じく16世紀のルツカウに残された手書きの賛美歌集などである。これら17世紀までの初期ソルブ記述文献、1650年のリュッベンの牧師コイナンによる最初の下ソルブ語文法[5]などは手書きであった。印刷出版へ拡張されたのは、広い意味での民衆教育の必要性から生まれた著作で、最初のソルブ語による印刷物は1574年の、シュトラウビッツの牧師モーレアの小教理問答集の訳、これには下ソルブ語による賛美歌集が添えられていた[6]。1595年には上ソルブ語で最初の出版物として小教理問答集の翻訳がバウツェンで出版され、それにはヴァリキウスによる「ソルブ語で文字を如何に使用し発音するかについての教授」が付録としてついている[7]。

宗教改革以前では、例えばマグデブルクで発見された12世紀のラテン語の手稿の中にソルブ語の書き込みがある[8]。ソルブ人による服務宣誓もおそらくこの時期、既にかなり書かれていたに違いないが、15世紀のものと見られるバウツェン市の「ヴェンデ市民の誓い(Der Burger Eydt Wendisch)」はよく知られている。それに続く時代、多くのソルブの言語遺産は厳しい、無慈悲な運命に見舞われた。1667年、ブランデンブルグ選定侯はブランデンブルグ辺境伯領並びに新領内のソルブ語使用地域にある総てのソルブ語文書を押収し、破棄するよう命令を出したのである。この処分命令は徹底して遂行され、選定侯領内にあったソルブ文献（1653年の詩篇、1654年の教理問答集並びに信仰個条、1654年の賛美歌集、1656年の聖書抜粋など）は、それらの処分通知によってその存在が知られている。1669年にはリュッベンに

4 Mikławš Jakubica. この新訳聖書訳はナイセ川東のジャリ（現在ポーランド）、ルブスコ(Lubsko)の辺りの、かつての西ソルブ方言で書かれており、ポーランド語の影響を示しているという（Schuster-Sewc 1976:29）

5 Jan Chojnan(1616-1664): "Linguae Vandalicae ad dialectum districtus Cotbusiani formandae."

6 Albin. Moller(1541-1618). この小教理問答集は1552年バウツェンで最初の印刷所を開いたWolrabのもとで印刷された（Jenc 1954:37-38）

7 Wjacław Warichius (1564-1618):"Der Klein Catechismus, Tauf- und Trau Büchlein D. Martini Lutheri, wendisch und deutsch in Druck verfertiget durch Wenceslaum Warichium, Groedicensem Pfarren zu Gödau.". 上記のモーレアのものと同様、バウツェンのWolrabのもとで印刷された（Jenc 1954:44-45）

8 この手稿はラテン語による賛美歌にドイツ語の訳が行間に添えられているもので、その中にDeus menus - knize boch moie, domino - knize,(...) venite - oidete, cantate - pogeteなどの書き込みが見られる（Jenc 1954:10）

あった下ソルブの上級宗教局から、ザクセン領の下ラウジッツに対して同様の命令が発行され、その直前に出版されたカーラウの教師エルメリウスの入門書[9]がこの犠牲になった。このほか、火災、戦禍、そしてナチス時代の意図的なソルブ文化遺産の破壊により、その後も損失は続いた。

二つのソルブ標準語と、その二つの使用領域の存在は言語学的というよりは歴史的に要因づけられる。二つの標準語の様々な言語的特徴は、上下ソルブの諸方言と完全な一致を示さない。上ソルブ標準語のいくつかの特徴は、下ソルブ方言の多くと共通し（例えばp, kの後でrが保たれる： prawy正しい, krawy[7]）また逆に下ソルブ標準語と上ソルブ方言が一致する場合もある（例えばš, žの硬音化：šyja首、žywjenje暮らし、人生[8]）。こうした現象は、二つのソルブ語を区別するための標識としてしばしば言及される、以下のような差異についても言える：

	上ソルブ文章語	下ソルブ文章語
音と文字		
h — g [9]	hora山, sněh雪	gora, sněg
č — c[10]	čas 時間 čorny黒い	cas, carny
ć, dź — ś, ź	ćěło身体 dźěd祖	śěło, źěd
形態論的特徴[10]		
双数-aj, -omaj — -a, -oma	dwaj wozaj, wozomaj	dwa woza, wozoma
不定形語尾	-nyć (wuknyć)	-nuś (wuknuś)
男性単数与格	-ej (konjej)	-oju (konjoju)
語彙[11]	prajić	groniś
	košla	zgło
	kwas	swjaźba

これらを始めとする両標準語の様々な特徴は、ソルブ語の方言分布とぴったり重ならない。上ソルブ語では用いないスピヌム（運動の動詞と共に用いられる特殊な動詞の形態）は、下ソルブ標準語では普通だが(ex. ds."Pojdu spat." cf. hs. "Póndu spać")、下ソルブ方言としてはコトブス以北にしか認められない。あるいは、下ソルブ標準語における、活動体（生物）を表す男性名詞双数での生格対格の一致(Mam dweju kónjowu. cf. hs. Mam dwaj konjej[=主格形に等しい]）は、上ソルブ方言でもしばしば見られるが、下ソルブに含まれるグーベン郡のホルノ方言では、上ソルブ同様、主格と同形になる[12]。

ソルブ語使用地域は比較的密な、方言上の差によってマークされる。これは部

9 G. Ermelius(Ermel, Juro). この入門書("fibla")は上掲のコイナンの文法とほぼ同時期のものとされる（Sołta 1976:56）

10 補注12を参照

分的には、上ソルブの祖先であるミルチャン族ならびに下ソルブの祖先であるウジチャン族の方言がもっていた、古スラヴ語時代の言語的特徴に因るものと言えるが、多くはその後の、さらに今日なお観察される、言語的発展の相異なる結果である。その中で、ソルブ語の諸方言に共通し、しかも、ソルブ語のみに見られる新しい要素がある。それは例えば、接頭辞z-を伴うhave動詞měć/měśの完了体の形成（hs. změju, ds. změjom）、TelT/TerTとTorT/TolTの一致（hs/ds.mloko, brjóh, hs. brjog. cf. pol. mleko, brzeg）などである[13]。従って、ソルブ語の言語領域は一つの連続体として捉えることができ、そこにおいては南から北に向かって等語線の数が増し、距離が遠ざかればそれだけ、言語的差異も増すのである。これらの等語線は二つの点で最も密になる。一つはホイェルスヴェルダとヴァイスヴァッサーを結ぶ線、今一つはスプレンベルグとムスカウを結ぶ線で、これらによってソルブ語使用領域は主として3つの地域、つまり本来のミルチャン族の居住地であった上ソルブ、本来のウジチャン族の居住地であった下ソルブ、それに東はムスカウ、西はゼンフテンベルクを結ぶ過渡方言地帯である。この過渡方言地帯で上下両ソルブ方言の諸特徴はぶつかりあい、両ソルブ語の特徴のどちらが優勢になるかは個々の方言によって異なる。

上ソルブ方言には、上ソルブ標準語の基礎となったバウツェン方言、カメンツとバウツェンの間のカトリック教区で使用されるカトリック方言、これに隣り合うヴィティヒェナウ方言、さらにいくつかの北あるいは北東森林地帯方言、それに語の最後から二番目の音節にアクセントがあることで際だっているノフテン方言[11]がある。下ソルブ方言には、パイツ周辺の北東方言、シュプレーヴァルト周辺の北西方言、標準語の基礎となったコトブス方言、シュプレンベルク方言、ホルノ方言などがある。この最後の方言はその著しい特徴によって他の総ての下ソルブ語方言と異なる。過渡地帯の方言は、上下ソルブの要素の現われ型の違いによってムスカウ方言ホイェルスヴェルダ方言、それにゼンフテンベルクに近いグロスコッシュ方言などに分けられる[12]。

ソルブ語はバウツェン、ラディボール、クロストヴィッツ、パンシュヴィッツ-クツカウ、ラルビッツ、それにコトブスで教育において使用され[13]、また、ソルブ人口のある総ての学区で教科として教えられている。ソルブ語の新聞、雑誌、様々なジャンルの書籍の出版も行なわれており、バウツェンのソルブ研究所、ライプツィヒ大学のソラビスティカ、さらに若干の外国の研究機関でその研究・育成がなされている。

---

11 補注12を参照

12 以上の方言区分に関して、原文ではラウジッツ内の地名を詳細に挙げているが、ここではそれらを総て挙げることはしなかった。

13 つまり「ソルブ語で授業が行なわれる」。但し、数学、理科などの自然科学系の教科はドイツ語の授業しかない。

補注

[1] ソルブ人とソルブ語の発生的な問題は、古い歴史文献の中で言及されているソルブ、あるいはセルブ、サルブという人々の由来（どういう経路でオーデル-ナイセ以西エルベ-ザーレ流域にやってきた人々か）、他のスラブ族との関係、またその「古ソルブ」と現在のラウジッツに住むソルブ人やソルブ語との関係といった角度から論じられる。

ソルブ語はその小規模な使用領域の中で方言的差異に富み、それらは南部の上ラウジッツ（ウジッツァ）Hornjołužicaの上ソルブ語グループ、北部の下ラウジッツDelnjołužicaの下ソルブ語グループ、この中間地帯の過渡方言（přechodne dialekty）グループに分けられる。Muckeは下ソルブ語がポーランド語に近く、上ソルブ語がチェコ語と共通の特徴を持つことから、ソルブ語を全体としてポーランド語からチェコ語への「橋」Brückeと特徴づけた（Mucke 1891: 3）。

ソルブ語とポーランド語の近似性についてはTaszycki, Stieberらポーランドの研究者が指摘しており、Taszyckiは共通スラヴ語にあった鼻母音*ǫ, *ęに変化が生じる以前の段階での古期ソルブ語と古期ポーランド語の使用領域は、ほとんど境界線のない連続性をもっていたと主張する。この鼻母音の変化の後にチェコ語の影響が現われ（hs. g>h, hs./ds. >z'）、ソルブ語、特に上ソルブ語はポーランド（レッヒ）語グループから切り離され、チェコ-スロヴァキアゴ語グループに近づいたという（Taszycki, W., Stanowisko języka łużyckiego, 1928. cit. Schuster-Sewc 1976: 71; Stone 1972: 95）。Stieberはチェコ-スロヴァキア語グループとその他の西スラヴ語の相異から西スラヴ語を2分割し、一方にチェコ-スロヴァキア語グループを想定し、他方、古上ソルブならびに古下ソルブグループ（彼の主張ではこれらは元来異なる方言グループをなしており、共通の「原ソルブ語」の様なものから後に分化したのではない）は、古（あるいは原）ポーランド-ポメラニア、古ポラブ語族と共に一つのグループをなすと見た。そしてMucke(1891)と同様、下ソルブとポーランド語の類似性に注目し、共通スラブ語末期からスラヴ分裂時代の早い時期、既に上ソルブグループはレッヒ語グループから離れ、チェコ語の影響を受けて独自の発展をとげたとする。チェコ語の影響はg>hの変化によって示される（Stieber, Zd., Stosunki pokrewieństwa języków łużyckich, 1934。なお、Stieberのソルブ語研究についてはStone 1972: 96-103; Schuster-Sewc, 1976: 71; Jenč 1977: 58)。

Трубачев (1982) は、ソルブ族は南から移住し後に西方化(окцидентализация)したと考える（Трубачев 1982: 6）。これはスラヴ人原居住地（少なくとも共通スラヴ語時代末期における）推定論の中で、その居住地をオドラ-ヴィスワ川地帯とする説に反論しつつ言及されているもので、ソルブのみならずレッヒ語族もそこが元来の居住地であったのではなく、やはり南から移住してきたものだとする。

Schuster-Sewcは古ソルブ部族を、元来の居住地であったウクライナ北西～ポーランド南部の地帯から北西へ進み、エルベ-ムルデ流域からオーデル-ナイセ流

域地帯に入った集団で、これは基本的にチェコ-スロヴァキア語グループとともに南西スラヴ語グループに属するとする。即ち、彼の説によれば、西へ進んだ古ソルブ語族はモラヴィアからボヘミア盆地を経て6－7世紀、現在のラウジッツを含むオーデル-ナイセ以西の地に広く定住した。古ソルブグループは、スラブ祖語の*ę>ą>('a), *ě>i^{e}に近い発音、*ъ>*ъ^{o}, g > γ などの音変化によって特徴付けられ、これらがチェコ、スロアヴァキア、ウクライナ、部分的にセルビア・クロアチア語に共通することから、これらの言語グループを共通スラブ語時代末期における南東グループ süd-östlicher Innovationstypとする（Schuster-Sewc 1982:118; 1992:9-11）。一方、同じ時期に北西から、レッヒ語族の一部がオドラ川を越えてシュプレー川沿いに南下し、南から北上してきた本来の古ソルブと接触した。後者はレッヒ語（古ポーランド方言、ポラブ－ポメラニアなどの西レッヒ語）の音変化（所謂 "przeglos lechicki" cf. Carlton 1991:252）の特徴、即ち*tьrt>*tьrt, *ě(+T) >'a (ex. ds. dźad < *dědъ; pjask < *pěsъkъ) などを示し、北西古方言nordwestlicher archaischer Dialektypに属する（Schuster-Sewc 1982:128-12; 1992:12）。この両方の移住の波が接触した結果、今日のラウジッツに残るソルブ語が形成された。この過程において、現在の下ソルブ語につながるラウジッツ北部並びに東部（その一部はナイセ川の東、現在のポーランドに含まれる）、すなわち元のウジチャン族の言語にはレッヒ語の特徴が強く現われ、一方南のミルチャン族、すなわち現在の上ソルブ人の祖先とされる部族への影響は少なかったと見る（Schuster-Sewc 1976; 1982; 1983; 1992)。これによって上下ソルブの中間の過渡方言の混成的な性格、入り組んだ等語線が形成される下地が作られたと見る。

[2] (*kt) > *t'の南スラヴ語の変化は、細かく見ると бъл. *t'> št, s.-cr. (štokavski) > ć, スロヴェニア語 > š, マケドニア語 > ќ (k')。西スラヴ語グループを特徴づける音韻変化として、周知のように *dl, *tl の結合の保持、*gv/*kv+ě, i (< i.e. *oi, ai) の位置でのgv, kvの子音結合の保持などが挙げられ、これらの特徴によって西スラブ語グループは東-南スラヴグループと区別される。無論、こうした西スラブ語共通の特徴といわれるものも、方言的例外が見られる。例えば、下ソルブ西部の方言では*dl>lの変化が見られる：buliś (<bydliś) (Schuster-Sewc 1982:115)。この特徴はスロヴァキア中部にも見られ、*dl, *tl>l、あるいはこれと関連した *dl, *tl > kl, gl の交替は、共通スラヴ語末期のスラヴ諸方言の関係を考えるうえで興味深い材料を提供する（cf. Филин 1972: 272-278）；*gv/*kv+ě, iの結合に関しては、本文でも言及されているJakubica (1548)に、kwiliśと並んでcwiliśが見られる（Schuster-Sewc, ibid.）。

[3] 注1でも述べたように、「ソルブ」を巡る発生的な問題は、歴史文献に残されているソルブあるいはセルブ、サルブといった名称をもつ人々の正体とその呼称の由来―この問題はこうした文献が書かれた時代や場所とも関わる―、そして現在ラウジッツの地にいるソルブ人とそうした歴史の中のソルブ族との関係な

ど、互いに密接に関わりあういくつかの議論を含む。

ソルブSorbあるいはセルブSerbと言う名称はもちろん、直ちにバルカンのセルビア人(srbin, 複数 srbi)の呼称を想起させる。ソルブならびにバルカンのセルビアの呼称は、歴史的にSorb/Surb/Serb/Sarb/Srbといった言及が残されている。Sorb/Sarb/Serbなどの名称と、ポーランドにおけるSarbia, Sarbice, Sarbiewo, Sarbino, Serbowice, Sirbowice, シュレスヴィヒホルシュタインのCerbeke (polab.)、チェコのSrbice, Srbsko, Srbyといった名称、地名との関係という問題もある。この呼称の起源、並びにこの名で呼ばれた人々の素性、後の分化の過程、周辺の諸民族との関係についてはいくつかの説がある。まず呼称の起源は、これを東方コーカサス系とする、つまり紀元1世紀にプリニウスが「自然史」の中でふれているSerbi, 2世紀プトレマイオスによって言及された、カフカスからヴォルガ川の間に住むSereni(後の校訂テクストでSerbi, Σερβοι)と結び付ける考えと、これに反対し、この一致は偶然のものとする見方がある。後者にはポーランドの歴史／言語学者の研究、例えば Łowmiański 1964: 53-57などがある。Schuster-Sewc(1983:138)によれば、Łowmiańskiはスラヴとコーカサスのの間に関係があるとは言えない("nie zachodzi żaden związek między słowiańskimi i podkaukaskimi S.")と主張する。一方、前者の立場は、例えばロシアのТрубачев (Трубачев 1974:61) に見ることができる。

現在のソルブ人の祖先はシュプレー川流域に定住したミルチャンMilčan/Milzen、ウジチャンŁužičan/Lusizenといった部族名で知られている集団とされるが、これらを本来のソルブ族、つまりSorb/Serbといった名称で歴史上言及されている人々とは別の部族と考える立場がある。この考えでは、本来のソルブあるいはセルブは、現在のソルブよりはるか西、エルベ以西にいたスラヴ系部族のもっていた名称であり、これが後にシュプレー流域のミルチャン、ウジチャンといった部族の名称になったとするが、これはウジチャン、ミルチャンら現在のソルブの祖先に当たる人々の起源をポーランド、ポラブなどと同じレッヒ系ととらえる考えと部分的に重なる。

スラヴ世界の西端とバルカンのSorb/Surb/Serb/Sarb/Srbの共通起源として、Schuster-Sewc(1982;1983)は共通スラヴ時代末期(5-6世紀から始まるスラヴ諸民族の地域的かつより明確な言語的分裂に先立つ時代)に、南ポーランドから北西ウクライナ地帯にいた*Sъrbъ/*Sьrbъという部族集号体を想定する。6世紀を中心として起こった民族移動の動きの中で、北西へ進んだ集団は、モラビアからボヘミアをへてエルベ-ムルデ-ザーレ流域からオドラ-ブーブル流域にかけて足跡を残した古ソルブ部族集団であり、一方、南進してカルパチアの南に入ったのがセルビアであるとする。Vasmerはスラヴ祖語における語形を*Sьrbъとしている(Vasmer, ЭСРЯ, 2изд. 1987. III, 603)が、Schuster-Sewc(83)は共通スラヴ時代末期における語形を*Sъrbъ/*Sьrbъの双方と想定し、北西へ進んだ原ソルブ部族がこの両方のヴァ

リアントから呼称を得た(Sorb/Serb)のに対し、南下したセルビアは*Sьrbъからsrbを得たとする。

中世ヨーロッパの歴史上最初にみられる古ソルブへの言及は、エルベ以西のスラヴ人を指す名称としてSurbのような-u母音を持つもの（631／632年のフランク王国の年代記中の"Dervanus dux gente Surbiorum"、789年のAnnales regni Francorum中の"...quorum vocabla sunt Suurbi"、9世紀中期のバイエルン地形図の"regio...Surbi"）で、o-母音を持つ形が多く見られるようになるのは8世紀以後である（806年のAnnales regni Francorum 中の"...inter terram Sclavorum, qui dicuntur Sorabi..."）。Niderleはこうした歴史上の記録から、本来の"ソルブ"はムルデ川(Mulde/Modła)流域に住む人々を指し、後にこの名称がルジチャン、ミルチャンなどシュプレー川地帯に住むスラヴ部族を指す名称として用いられるようになったと唱えた(Niderle, L., Slovanké starožitnosti, Praha 1919, Bd.3 113)。11-12世紀のチェコのCosmasのChronica Boemorumの中でSirbia, Sribia, Zirbiaといった名称が、マイセン辺境伯領のスラブ人を指すために用いられていることから、ポーランドのTyszkiewiczも、こうした呼び名が12世紀には、本来のソルブ人以外のレッヒ系部族に拡張されたと見る（Tyszkiewicz, L.A., "Podziały plemienne i problem jedności Słowian serbołużyckich." Słowiańszczyzna połabska między Niemcami a Polską, Poznań 1981, pp109-131, p.127. cit. Schuster-Sewc [1983:140]）。これに対しSchuster-Sewcは、エルベ-ムルデ以東オーデル-ナイセ以西のスラヴ人を指す名称として用いられたSerb. Sarbが、より古い時代の、エルベ-ムルデ以西のSorbから後に拡張されたという説に異議を唱える。一つの事実として、確かに、古くからSorb/Surbと呼ばれていた西（エルベ以西）のスラヴ民族と、エルベ以東の、現在のソルブに繋がるSerbとが、中世以降、ラテン語ならびにドイツ語の文献で区別なくSorbと呼ばれるようになったことがある。（が、これも17世紀までのドイツ語文献ではSerb,Sorbの双方が用いられており、ドイツ語による文献でSorbが定着するのは18世紀以後となる。）この事実は、しかし、Serbという名称がSorbから派生し、エルベ以東の、本来の古ソルブ族とは異なるスラブ諸部族を指す名称として後に（11世紀以後）用いられるようになったことを直ちに意味しない。Schuster-SewcはSorb/Serb/Sarbといった異なる母音をもつ呼称の発生を、共通スラブ語時代の*sьrbъ/*sьrbъの*ъ/*ьの地域的な変化の結果と見做す。Schuster-Sewcは、Sewc :1982 まではSorbの語源を*sьrbъとし(cf. Vasmer, 上掲書）*sьrbъ>*sъrbъ>sorbが生じたとしている。この変化は*tьrt>*tъrt>tort — その平行的な例としてhs. šow<*šъvь<*šьvь; *pьrst>pъrst>porst, あるいはWolkow, Wolkenitz<*vьlk（地名）があげられる — に因るもので、同じような*tьrt>*tъrt>tort/tartといった現象は他のレッヒ語グループ（ポラブ、スロヴィンツ、カシューブ）や部分的に南スラブ語にも見られる（Schuster-Sewc 1976:75）。ただし、Schuster-Sewc(83)ではスラブ民族の分裂以前の共通スラヴ語時代末期、既に*sъrbъ/*sьrbъのヴァリアントがあったと修正を行ない（83:144）、

この二つのヴァリアントから、上記のようにSorb/Serbを得たとしている。また、Surb／Sorbというu-からo-のヴァリアントは、オーデル-ナイセ以西からエルベ-ムルデ-ザ-レ流域に定住した部族（本来のソルブ部族集団）の方言的特徴の一つとして見られる*ъ>*ъ^{o}>oの変化（82:118）のъの音価と結び付けられる（83:139. 平行的な例としてsmurd - smord [1985: 853]; エルベ-シュバルツエルスター流域の地名に残る平行的な現象についてはまたEichler E. & H.Walter 1981:353）。またSarbのa-母音のヴァリアントは、エルベ以東、シュプレー流域の、現在の下ソルブ語使用地域の北からフランクフルト・アン・デア・オーデルからダーメの辺りに残されており、これは、ポーランドの地名に残るSarbiewo, Sarbiaなどとともに、レッヒ語の音変化　*TъrT>TärT>Tart/TerTの特徴（例えばds. tergaś/targaś<*tъrgati, sarna<*sъrna<sьrna. Schuster-Šewc 1982:127-129; cf. pol. *tъrt>tart: *tъrg>targ [Carlton 1991: 249]）と結び付ける。

上記のTyszkiewiczが、本来のソルブ人以外のレッヒ系部族に12世紀後半以降拡張されたと見るSirbia, Sribia, Zirbiaといった名称については、Schuster-Šewcはьが11世紀にはまだ、後にSerbとなる完全母音に至っていなかった事の反映とし、このことはSerb<*Sьrbの形と、この名で呼ばれる部族の存在が、Surb/Sorbと同じように古いものであることを示す証拠であると見る。

また、*sъrbъ/*sьrbъの語源は、Vasmer (ЕСРЯ III:604)のсербать (хлебать), ПраСлав. *sьrb-, *sъrb-, あるいはKopěcný 1981:362 のあげている st.sl. sьrbati, č. střebat, hs. srěbać, ds. srjebaś "音をたてて[乳などを] 吸う(？)" と共にIE.*surbh-, *sirbh-と結び付け、原始社会においては単に「同じ乳を飲むものの集団」を表したのが部族の名称になったのだろうと推測する（1983:146）。この傍証としてMachekが Etymologický slovník jazyka českého (2ed) (1968:585)にあげているMlékosrby (? Dt. Milchbrüder)も指摘されている。

[4]　ソルブ人に対する様々な差別と弾圧は、中世から近代に至るドイツ社会で続いた。13世紀以後制度されるドイツ中世の身分制社会におけるソルブ人は概略、刑吏や一部の特殊な職人、遍歴の旅人などの職業的賤民、あるいはユダヤ人、異教徒などと共に賤民の扱いを受け、市民権もツンフトその他のギルドへの加入も認められなかった（阿部謹也「刑吏の社会史」〔講談社学術文庫「ヨーロッパ中世の宇宙観」収録〕114-115）という形で捉えられる。ソルブ語の禁止やツンフトからのソルブ人締め出しはラウジッツ以西の、ドイツ化が早く進んだ地域では13世紀から既に進められた（1293年、ベルンブルク・アン・デア・ザーレでまず、法廷でのソルブ語の使用禁止令が出される）が、一方、ラウジッツ内部では14-5世紀頃まではソルブ人への差別はまだそれほど徹底したものではなかった。この頃のラウジッツは、比較的大きな町で既に半数あるいはそれ以上がドイツ人住民（例えばバウツェンでは1400年頃で人口5000のうち2／3がドイツ人）だったが、より小規模な町ではソルブ人の割合が高く、こうした地域ではまだソ

ルブ人の社会的立場も認められていた。1336年にはレーバウでソルブ人が市参議会員、1362年にはカミェンツでソルブ人の町長があったという記録も残されている（Kunze 1990:15-16）。その後ラウジッツ内においても強化される、ドイツ化に伴うソルブ差別の中で、ソルブ人口の大部分は19世紀前半に実現される農奴開放の時期まで、大部分が農奴として土地と領主に隷属した。

フィヒテは1807年から翌年にかけて、ベルリンで「ドイツ国民に告ぐReden an die deutsche Nation」を発表したが、その中の１２章でソルブについて言及している：「ヴェンデ語（論者註：ヴェンデWendeという呼び名は下ソルブ地域のドイツ人の間では今も使用されるが、ソルブの人々には差別的と受け取られる場合が多い。第二次大戦後、公式にはもちろん“die Sorben”である）はその民族が自由を失って以来数百年なお存在しているといえるだろうか。それは土塊にまみれたる哀れなる奴隷の小屋の中に於てのみであり、しかもその奴隷は征服者から理解せられることもなく、その小屋の中でみずからの運命を嘆じているのみである(フィヒテ:254)」。こうした被差別的立場にあったことがソルブ社会の独自の発達や言語文化の発展を妨げ、補注6で述べるように、統一された標準語が形成されなかったことの主要因となったと考えられる。

[5] ソルブに関する統計上の問題は、「ソルブ人」をどう定義するかによってソルブ人口が大幅に変わる点にある。ソルブの様に、歴史の長い間、他民族と共住してきた民族においては、本人が何人の自覚を持つかは遺伝学的な意味でのエスニシティ以上に、個人の生活環境や社会環境が重要な要因となる。また、ソルブ人であることを認めることが必ずしも社会的に有利にならない（歴史的差別、DDR時代の政策などに由来する）状況においては、本人のエスニシティの自覚は非常に微妙な心理的要因を含む。Elle(92)は、これまでのソルブ人口に関する調査研究では、こうした様々な要因を考慮にいれた社会学的（社会心理学、社会言語学を含む）理論付けのないまま恣意的に調査が行なわれてきたことが指摘されている。過去においては言語の知識を主たる標識とした資料があるが、Elle(92)の調査が示すように、エスニシティの決定に言語は重要な要因となるとはいえ、言語の知識とエスニックなアイデンテティは必ずしも一致しない（Elle 1992:123-124）。Elleの最新の調査では例えば、ソルブ人としての自覚を持つものの中でソルブ語の能力を持つものは約90パーセントに達するが、逆にソルブ語の能力を持つもののうち36パーセントがソルブ人としてのエスニックな自覚を否定している（124）。また、客観的基準（一般に、他人をソルブ人と認めるかどうか）については、出生即ち遺伝学的要素やソルブの文化生活様式への同化の程度を重視する割合が、言語の知識を重視する割合を上回り、一方、主観的基準（自分をソルブ人として認めるかどうかを判断する基準）においては言語の知識の有無、ついで生活様式への同化をその基準とみなす割合が高く、出生を重視する割合は半数に満たない。

このようにエスニシティと言語使用集団とは一致しないが、言語人口は、その言語によって連続するエスニック集団の規模を知る一つの目安になることは確かであろう。ところが、言語使用集団を、その言語を「母語」とするものの集団と規定したとしても、ソルブ語を母語と認めるかどうか、その主体的自覚の基準はソルブのような完全な二重言語使用集団（しかもそこにおいてはドイツ語が圧倒的に社会的優位を保っているような）では一様ではなかろう。また、ソルブ語を「母語」と認める人々の集団を言語使用集団と考えても、実際にはその運用能力の個人差、あるいはその人が属する地域社会におけるソルブ語の機能範囲の差などが予想される。こうしたさまざまな隔差の扱い方次第で、ソルブ語人口も8万から、最小で4万程の値を得ることになる。例えば1955／56にTschernikが「ソルブ語の能力を有するもの並びにその14歳以下の子供」の数として8万1千という統計を出している（Elle 1991:24）が、Elleはこの数値を最大限に見積った数値と見ている。Urban(1980)ではソルブ人口は約4万（Urban, Die Sorbische Volksgruppe in der Lausitz 1949 bis 1977. Marburg, 1980:18）だが、これは下限を示したものと考えられる（Brijnen 1991:29）。1987年のソルブ研究所の調査では、「ソルブ語の能力を持つもの」の数約6万7千、「ソルブ人としての自覚を持つもの」の数は4万5千（Elle 1991:24）となる。

[6] ここで指摘されているように、地理的にも人口的にも非常に小規模なソルブ語利用領域で、異なる二つの文章語、後に標準語が形成されたことは、その複雑な歴史的背景に求められる。即ち、２０世紀に至るまでソルブ社会全体としての社会的連続性が形成されなかったこと（ラウジッツ地方が南はザクセン、北はプロイセン領に属し、地域的、行政的連続性が形成されなかったこと、ナチスによる壊滅的な対ソルブ政策を生き延びた戦後においてさえこの状況は、下ラウジッツがコチェブス県、上ラウジッツがザクセン県に行政区分されるという形で継承されたこと、10世紀以降の歴史上ソルブ人は常に被差別階級であり、いかなる形でもソルブ社会がそれ自身の社会的、政治的自立性を持たなかったこと）に求められる。

一般に、いくつかの方言的差異を含む、不均質な言語使用領域において共通の言語基盤が形成されるためには、政治・行政的な枠組み、共通の経済通商圏の形成といった社会的連続性、あるいは宗教などの文化的連続性が要求されよう。こうした要因のどれが決定的であるかはその社会の構造によって異なる（イスラム圏におけるコーランのように宗教上の要素が大きな柱となる場合もある）が、おそらく近代社会においてもっとも重要な役割を果たすのは政治や経済活動などの社会的要素であろう。上下両ソルブ語に含まれる多様な方言的な差異 ― その発生は事実、Schuster-Sewcの一連の主張のように、異なる言語的特徴を有する民族の混成に由来するかもしれない ― が、一つのまとまった"ソルブ標準語"の形成を妨げたことは一つの事実であろうが、方言的不均質性が統一標準語の形成におい

て必ずしも障害とならないことは多くの言語の例が示している。南スラヴのセルビア・クロアチア語の標準語形成の過程を見れば、セルビア・クロアチア語の標準語形成の動きは、１９世紀の南スラヴ民族の政治的独立の要求の中に位置づけられる。そこにおいてはヴーク・カラジッチの提唱した新シト方言による標準語の規範に呼応して、クロアチアのガイを中心とするイリリア運動の推進者達がザグレブを政治的中心とする北西クロアチアで広く使用されていたカイ方言、あるいは“クロアチア文学”の伝統を担うとみなされていたダルマチア地方のチャ方言などでなく、この新シト方言を標準語の規範とすることに同意したことが大きな意味を持つ。この背景として、新シト方言がセルビア・クロアチア語使用領域においてすでに１７世紀以来コイネー（地域共通語）として広く使用されていたこと、クロアチアのイリリア派としても「南スラヴ民族の団結と政治的自立の獲得がクロアチアの利益を実現させる」という図式の中で、カイ方言に執着するよりはシト方言を採用したほうが明らかに有利であったという状況がある(cf. Katičić 1986)。無論、セルビア・クロアチア語の標準化はこの時期、すなわち19世紀半ばまでのスラヴ・ロマン主義の時代に整ったわけではなく、様々な対立を経て19世紀末に一応の決着を得ることになる。

標準語の在り方に政治や行政的な枠組が大きく関わることはまた、セルビア・クロアチア語使用領域における政治的対立、ことにセルビアとクロアチアの利害対立が標準語の問題にも影響を与え続けたことからも明かである。これは例えば、戦前のセルビア覇権主義に反対するクロアチアの分離民族主義（「セルビア語とクロアチア語の違い辞典」cf.Banac 1984:244）、あるいは第二次大戦中のナチス傀儡政権であったNDH時代の言語政策（いわゆる「語根式正書法」「クロアチア国内でのキリル文字の使用禁止」など）、さらには戦後ユーゴスラヴィアのノヴィサド協定に対するクロアチアの反発（67年のマティツァ・フルヴァツカによる「クロアチア語の名称と地位に関する宣言」）などに容易に見て取ることができる。なお、ユーゴの崩壊、内戦、独立国家への移行により、現在クロアチアでは標準クロアチア語を標準セルビア語からなるべく遠ざけようとする傾向が進んでいる。正書法ならびに正字法の改革（改悪？）は現在クロアチアでもっとも起こりそうな変化で、92年にはNDH時代の語根式正書法辞典が再版され、ń, ĺなどの旧字を現行のnj, ljに変えて用いた出版物も現われている。マティツア・フルヴァツカが正書法改正のための委員会を設置したという噂も流れており（92年12月現在）、その行方は未だ不安定である。

18世紀以前のソルブ文献は聖書の翻訳など宗教的文献がほとんどで、文章語の規範もこうした宗教文献から形成されていく。この事情は上下ソルブ共通しているが、宗教改革以後、下ソルブがプロテスタント教会の勢力下に入ったのに対し上ソルブの一部、特にバウツェンの西、カミェンツを中心にカトリックの勢力がそのまま残った。このため、上ソルブ地域では18世紀までにプロテスタントと

カトリックによる文章語の規範が別々に形成された。19世紀以後のSmoler, Zejler, Jordanといったソルブ文章語の確立を目指した人々にとってはまず、このプロテスタントヴァリアントとカトリックヴァリアントの差異の克服が課題であった。この二つのヴァリアントの相違は形態論的なもの、例えば形容詞男性-中性単数生格の-oho, -omu::-eho, emuなど（Stone 1972:114）もあるが、主として文字と正書法にあり（例えばſはカトリックヴァリアントでは常にsを現すのに対し、プロテスタントヴァリアントではs,zの双方に対応する。また、プロテスタントヴァリアントではsにたいしſ,ſſ,ßの３通りのヴァリアントを持つなど：Faßke 1984:873. またMucke 1891-1965:18にこれらヴァリアントの一覧表を見ることができる）、19世紀半ばまでに上記の人々によってこの差を克服するための試みが行なわれた。H. Zejler (1804-1872) は当時の若いスラヴロマン主義者達と同じように、ヘルダーやグリムの影響を受け、また学生としてライプチヒに滞在中セルビアのヴーク・カラジッチの業績を知り、これらに触発されて民衆の言葉に基づいた文章語の規範の確立を目指した一人だが（Faßke 1985: 658）、彼の、バウツェン方言を元に書かれた1830年のソルブ文法（Kurzgefaßte Grammatik der Sorben - Wendischen Sprache nach dem Budissiner Dialekte, Budissin 1830）と、そこで試みられた正字法は今日の上ソルブ標準語の基礎となった。さらに1847年、Smolerによってマチッツァ・セルブスカMaćica Serbskaが設けられ、Smoler、Hórnikらがヴァリアントの差異を最小限にとどめた「相似的正字法」を提案、1860年代以後、この相似的正字法が1937年のナチスによる弾圧の時まで用いられることになる。ただ、子音のc,z,sは戦前までカトリックソルブ、プロテスタントソルブがそれぞれ異なる字体を用いており、これらの統合は戦後のことになる（Faßke 1984:876-878）。

[7] ソルブ語諸方言の音韻、形態、語彙的特徴の分布によって描かれる等語線は概略、ラウジッツ中部を東西に走るが、いくつかの線は南北に走り、ソルブ方言を東西に分断する。下ソルブ地域の南東に位置するムスカウMuskau(Mužakow)の方言を観察したロシアの言語学者Щербаが、南北のほかに東ソルブ方言を認めた（Щерба, Восточно-лужицкое наречие, Петербург, 1915）ことはよく知られているが、ソルブ方言の東西差、特に下ソルブにおけるそれは、その後もしばしば指摘されている（Michałk 1982: 142ff; Schuster-Sewc 1992:10）。本文中で指摘されているp, k+rは、下ソルブのいくつかの方言、特に西部で、この位置に現われるrが常にšに交替する（pšawy<prawy, kšasny<krasny）のに対し、下ソルブ東部の方言は上ソルブと同様、後方母音の前で本来のpr, krの結合を保つ（Stone 1972:115; Stone 1985:100）。現在の下ソルブ標準語はpš, kšの特徴を持つコチェブス方言を元にして形成されているのでこの特徴が現われるが、かつての文章語規範の過程においては、この東西の方言差を克服するために苦心が払われた。例えば、コチェブス方言を元に下ソルブ語の規範を設定しようとしたFabricius (1709)、さらに後のFryco (1796) などは、schという綴りをもって、それを使用するものはそれぞれの方

言によってこれを/š/あるいは/r/の音を表すと考えることを提唱した(Stone 85: 100-101)という。このような、音韻的な方言差を正字法の上でのみ統合する試みは珍しくなく、例えば、セルビア・クロアチア語のエ方言とイェ方言の違いの表記に際してěを共通の文字として用いることを提唱した人々の考えを連想させる(cf. Jonke 1967:59-60)。

[8]下ソルブ標準語ではš, žは硬子音で、この特徴はポーランド語と共通する。かつての東ソルブ方言（Muskau方言）では上ソルブの軟音と下ソルブの硬音の中間を示すという（de Bray 375）。SSAの方言分布を見ると、š,žが硬子音となる方言は上下ソルブ全体に広く分布していることがわかる(SSA Bd.13: 153-158)。

[9] g>hの変化は上ソルブと下ソルブの違いを特徴づけ、前者をチェコ語と結び付ける大きな標識となる。この特徴に関する両ソルブ間の等語線は、ムスカウの南とホイェルスヴェルダの北をほぼ東西に走る（Schuster-Sewc1983:137）。下ソルブ方言領域内の東西差は上記[7]に指摘したが、Schuster-Sewcはかつてのソルブ居住地であったシュヴァルツエルスター流域に残る地名から、西の原ソルブ方言では、上ソルブと同様のg>γ>hが認められるとしている（たとえばHozk, Huzk, Ocrul<Okrǫglъ）（Schuster-Sewc 1992:12)

[10] 所謂cokanje, цокание。č>c, š>s, ž>zのような口蓋シュー音から歯擦音への移行はスラブ各方言に見られる。セルビア・クロアチア語におけるこの現象、所謂cakavizamは、ダルマチア地方のチャ方言、イストラのイ方言、ツルナゴーラの一部に見られ、ロマンス系言語（とくに北西イタリア・トスカナ方言）の影響とされ、語末の -m>-n の交替などとともに「アドりア現象」あるいは「ダルマチア現象」と呼ばれる(Ivić 1958:56, 191, 256; Peco 1985:151)。

東スラブ、西スラブ各方言のこうした変化（古代ロシアの北／北東方言、ポーランド語方言のいわゆるmazurzenie、下ソルブ語）については、その時代確定と起源について色々に考えられてきた。Baudouin de Courtenay、Чернышевなどはフィン-ウゴル語族との接触の影響を唱えた（Бодуэн де Куртенэ, "О смешанном характере всех языков." 1901 [1963: 369] ; Чернышев "Как произошла мена *ц* и *ч* в русских говорах?" 1902. cit. Филин. 265）。цоканиеの起源を、バルト海の古サーミ族に由来するという説（Бубрих Б. "К вопросу об отношениях между самоедскими и финно-угорскими языками." Изв. Отд. литер. и языка АН СССР, VII, №6. 1948, 516. ci. Филин 266）では、古サーミ族は現在よりずっと南に居住しており、čの音をもたないこの言語の特徴がこれと接触する周辺の諸民族へ、東西に広まったとする。しかし西、或いは北西スラヴ諸方言に見られるцоканиеの起源を、直接にフィン・ウゴル系言語との接触に求めることには難点もある。例えば、フィン系言語と直接接触のなかったはずのポーランド各方言に見られる語の 'mazurzenie'の説明がつかない。そこから例えばA.Селищев はポーランド語の mazurzenie に、フィン・ウゴル系からの直接の影響ではなく、マゾフシェ地方におけ

るバルト系（古プロイセン）言語からの影響を主張した（Селищев 1931:723ff）。しかしСелищевは下ソルブ語やポラブ語に見られるцоканиеは比較的新しい、ドイツ語の影響による変化と見た（728-729）。

cokanjeの生じた時期に関しては、Nitschは共通スラブ語時代の方言的変化と、古い時代に設定したが、Stieberはmazurzenieの現象をかなり新しく、12世紀後半を下らないものと見る（Филин, 266）。Schuster-Sewcの一連の下ソルブの起源に関する説はレッヒ語グループとの強い結びつきを主張しているが、このcokanjeもポーランドの方言におけるmazurzenieや、あるいはロシアのノヴゴロド、プスコフ方言に見られるcokanjeと結び付け、共通スラヴ語時代末期の特徴とみなす(Schuster-Sewc 1976:75; 1982:115)。

[11] Schuster-Sewcは補注3で述べたように、下ソルブ語に見られる様々なレッヒ語グループとの共通点を指摘しているが、そのなかで、西レッヒグループとの語彙上の類似点としてgroniśを挙げている: cf. polab. gornět<*gorniti (1992:13). このgroniśは、下ソルブ人のあだ名'gronjak'になっている（Lötzsch 1963:178）。

現在見られる上ソルブ語と下ソルブ語の語彙的差異は、その文章語—標準語形成の過程の中で、上ソルブではドイツ語化された語彙を排除する「純化」が積極的に進められた（例えば、19世紀までにドイツ語化されていた語彙に古いスラヴ系の語彙を復活させる：lóft (Luft) → powětr, lazować (lesen) → čitać, 新しい翻訳借用語を作る：stawizny = Geschichte [<stać so = geschehen] など）のに対し、下ソルブではその傾向が弱かった（Stone 1972:120; Sewc 1977:38ff)ことが大きく起因している。この影響は語彙の方言分布にも及んでいる（SSA Bd.1-10)。

[12] ソルブ語の男性名詞は男性人間形、活動体（人間以外）、不活動体のカテゴリーを持ち、現在の標準語の対格形は以下のようになる：

	男性人間形	活動体	不活動体
sg.	hs./ ds.=G	hs./ ds. =G	hs./ ds. =N
du.	hs./ ds. =G	hs. =N ds. =G	hs./ds. =N
pl.	hs./ ds. =G	hs./ds. =N	hs./ds. =N

活動体（人間以外）双数対格が生格と同形になる上ソルブ方言は過渡地帯と接する上ソルブ北部に見られる（SSA Bd.11:42-43）。本文中で言及されている、最後から二番目の音節にアクセントがあることで特徴付けられるノフテン方言はここに属する。この男性活動体双数対格＝生格の一致の特徴の等語線は、男性双数生格形に下ソルブ語と共通する-owu(cf. hs. -ow)が現われる等語線との強い相似を示している（cf. SSA Bd. 11:196-197）。また、本文で指摘されている下ソルブのホルノの方言とは、下ソルブ北東、ポーランドと接する地域である。

なお、下ソルブ標準語の複数男性人間形の生格-対格の一致は上ソルブ標準語からの影響で定着したとされる（Janaš 1984:74）。

文章語の形成の過程の中で、二つのソルブ文章語を統合しようという試みもな

された。1880年Hórnikは、上下両ソルブに共通の文章語の設定を提唱し、また1928年にはNawkaが音声式正書法による両ソルブ語の接近を試みた（Stone 1972:121）が、二つの言語の統一は実現されなかった。しかしながら本文中で述べられているように、文章語一標準語の上での、上ソルブ語の下ソルブ語への影響は、正字法並びにいくつかの文法形式の上に現われ、本来の方言分布とはことなる標準語の形式を作りだした。最もしばしば指摘されるのは、アオリスト、インペルフェクトなどの単純過去形で、この形式は両ソルブ標準語が持っているが、下ソルブ方言ではこの形式は19世紀以来消失している（SSA Bd.11:100-101）。

[13] *tort/tolt, tert/teltのメタテーシスは両ソルブ語とも*tort>trot, *tolt>tlot, *tert>tr'et, *telt>tl'et. と発展する(Schuster-Sewc 1976:79; cf. Carlton 1991:254, 265, 274)。この点はポーランド語と一致するが、ソルブ語における後の発展は一様でない。例えば、

hs. *melko (>*ml'eko)>mloko, *bergъ (>*br'eh)>brjóh, *čerslo (>čr'eslo)>črjóslo,
　ただし*smerkъ>(*smr'ek)>šmrjók/šmrěk.

ds. *melko (>*ml'eko)>mloko, *bergъ (>*br'eg)>brjog.
　ただし *berza(>*br'eza)>brjaza, *velkti(>*vl'ec)>wlac.

上下ソルブ語共に、語末の硬子音の前で'e>'oの交替が生じる（常にではない）現象がある（hs. *ledъ>lód, *sestra>sotra. ただし*medъ>měd, *šestъjь>šesty ; ds. *ledъ>lod, *medъ>mjod. ただし*pero>pjero, *vedro>wjerdo. あるいは'e>'aになる：*br'eza>brjaza, *n'esu>njasu)）。この'e>'oの交替が生じる動機づけは困難とされる。また、後続子音の交替に伴う'e～'oの交替は形態素レベルではポーランド語に見られる（pol. [*nesǫ>] niosę - niesie, żona - żenić się）が、ソルブ語では稀（hs. wjesoły - wjeselić）か、生じない（hs. njesu - njese; ds.brjog - brjoze/brjag - brjaze）（cf. Carlton 1991: 254, 265, 274）。

このほか、上下ソルブに共通し、ソルブ語の特徴を際だたせるものとして、いくつかの語彙特徴、hs. wutroba, ds. wutšoba が「心」の意味になる(prasl. *ǫtroba, rus. утроба[内臓、体内], pol. wątroba[肝臓、レバー], s-cr. utroba[肝臓]. cf. Vasmer ЕСРЯ IV, 176), 「父親」がnan、などがある（Schuster-Sewc 1992:16）。

[参考文献]

ZfSL: Zeitschrift für Slawistik, Berlin　ВЯ: Вопросы языкознания

Banac, I., "Main trends in the Croat language question." Picchio R. & H. Goldbatt (eds.) *Aspects of the slavic language question.* vol I. Yale Russian and East European publications, 1984, 189-259.

Brijnen, H.B., "Written sorbian and spoken sorbian: reconsidering the role of codification." Barentsen, Groen, Sprenger (eds.) *Studies in West Slavic and Baltic linguistics.* Amsterdam, 1991, 29-43.

Carlton, C.R., *Introduction to the phonological history of the slavic languages.* Slavia Publishing, 1991.

De Bray, R.D.A., *Guide to the West Slavonic Languages.* Slavia Publishing, 1980.

Eichler E. & H.Walter, "Studien zur historischen Toponymie des Mittelsaale-/Weiße Elster-Gebietes." *ZfSL*, 1981, Bd.26, Heft 3, 314-360.

Elle, L., "Die sorbische Sprache als Komponente der Ethnizität der Sorben." *Lětopis* Serbski Institut, Bautzen: Domowina, 1992, No.1, 123-127.

Elle, L., "Die Sorben in der Statistik." *Sorben in Deutschland.* Maćica Serbska, 1991, 21-25.

Faßke, H., "Zur Herausbildung einer einheitlichen Graphik und Orthographie des Obersorbischen im 19. Jahrhundert." *ZfSL.* 1984, Bd.29, Heft 6, 872-878.

Fasske, H., "The historical, economic and political bases of the formation and development of the sorbian literary languages." Stone, G. & D. Worth (eds.) *The formation of the slavonic literary languages.* Slavia Publishing, 1985, 61-69.

Faßke, H., "Vuk Karadžić und Handrij Zeiler." *ZfSL.* 1988, Bd.33, Heft 5, 657-661.

Faßke, H., "Sorbische Sprache." *Die Sorben in Deutschland*, Maćica serbska, 1991, 27-33.

Faßke, H. et al. *Sorbischer Sprachatlas.* (SSA) Bd.1, 11, 13. Bautzen: Domowina.

Ivić, P., *Die serbokroatischen Dialekte. Ihre Strukture und Entwicklung.* Mouton, 1958.

Janaš, P., *Niedersorbische Grammatik für den Schulgebrauch.* Bautzen: Domowina, 1976 (2ed.) 1984.

Jenč, R., *Stawizny serbskeho pismowstwa.* Bautzen:Domowina, 1954.

Jenč, H., "Wuwiće a problematika sorabistiskeje dialektologije." *Sorabistiske přednoški,* Mjezynarodny wysokošulski kurs za serbsku rěč a kulturu. Budyšin - Lipsk. Bautzen: Domowina, 1977, 54-62.

Jonke, Lj., "Die Entstehung der neueren Schriftsprache bei den Kroaten und Serben im 19. Jahrhundert." *Aus der Geistwelt der Slaven.* Otto Sagner: München, 1967, 55-67.

Katičic, R.., "O početku novoštokavskoga hrvatskoga jezičnog standarda, o njegovu položaju u povijesti hrvatskoga književnog jezika i u cjelini standardne novoštokavštine." *Novi jezikoslovni ogledi.* Zagreb: Skolska knjiga, 1986, 138-157.

Kopečný, F., *Základní všeslovanská slovní zásoba.* Academia : Praha, 1981.

Kunze, P., *Überblick über die Geschichte der Sorben.* Bautzen: Domowina, 1990.

Łowmiański, H., *Początki Polski.* Warszawa, 1964, Bd. 2.

Lötzsch, R., "Das Problem der obersorbisch-niedersorbischen Sprachgrenze." *ZfSL.* 1963, 172-183.

Mihałk, S., "Wo socialnohistoriskim pozadku dialektalnjeje diferenciacije serbšćiny." *Lětopis Instituta za serbski ludospyt*, Rjad A. 1982, 141-156.

Mucke, K.E., *Historische und vergleichende Laut - und Formenlehre der niedersorbischen (niederlausisch-wendischen) Sprache. Mit besonderer Berücksichtigung der Grenzendialekte und des Obersorbischen*, Leipzig, 1891 (rep.) 1965.

Peco, A., *Pregled srpskohrvatskih dijalekata.* Beograd: Naučna knjiga, 1985.

Schuster-Sewc, H., "Язык лужицких сербов и его место в семье славянских языков." *ВЯ*, 1976, №6, 70-86.

Schuster-Sewc, H., "Wuwiće spisownjeje rěče pola łužiskich serbow." *Sorabistiske přednoški*, Mjezynarodny wysokošulski kurs za serbsku rěč a kulturu. Bautzen: Domowina, 1977, 28-47.

Schuster-Sewc, H., "Die Ausgliederung der westslawischen Sprachen aus des Urslawischen mit besonderer Berücksichtigung des Sorbischen." *Lětopis Instituta za serbski ludospyt*, Rjad A. 1982, 113-140.

Schuster-Sewc, H., "Zur Geschichte und Etymologie des ethnischen Namens Sorb/Serb/Sarb/ Srb." *Lětopis Instituta za serbski ludospyt*, Rjad A. 1983, 138-147.

Schuster-Sewc, H., "Zur Geschichte und Etymologie des ethnischen Namens Sorb/Serb/ Sarb/ Srb." *ZfSL.* 1985, Bd.30, Heft 6, 851-856.

Schuster-Sewc, H., "Zur Problematik der Entstehung des Niedersorbischen." *Lětopis.* Serbski Institut, Bautzen, 1992, 9-18.

Stone, G., *The smallest slavonic nation. The Sorbs of Lusatia.* London: Athlone Press, 1972.

Stone, G., "Language planning and the lower Sorbian literary language." Stone G. & D. Worth (eds.) , *The formation of the slavonic literary languages.* Slavia Publishing, 1985, 99-103.

Sołta, J., *Zarys serbskich stawiznow.* Bautzen: Domowina, 1976.

Vasmer, M., Етимологический словарь русского языка (ЭСРЯ) М.: Прогресс, 2.изд.

Бодуэн де Куртенэ, И.А., "О смешанном характере всех языков" В *Избранние трыды по общему языкознанию, т.1.* Л. АНСССР, 1963, 363-372.

Селищев, А., "Соканье и шоканье в славянских языках." *Slavia.* 1931, 718-741.

Трубачев, О.Н., "Ранние славянские этнонимы - свидетели миграции славян." *ВЯ.* 1974, №6, 48-67.

Трубачев, О.Н., "Языкознание и этногенез славян. Древние славяне по данным

этимологии и ономастикн." *ВЯ*. 1982, №5, 3-17.

Филин, Ф.П., *Происхождение русского, украинского и белорусского языков.* Л:Наука 1972.

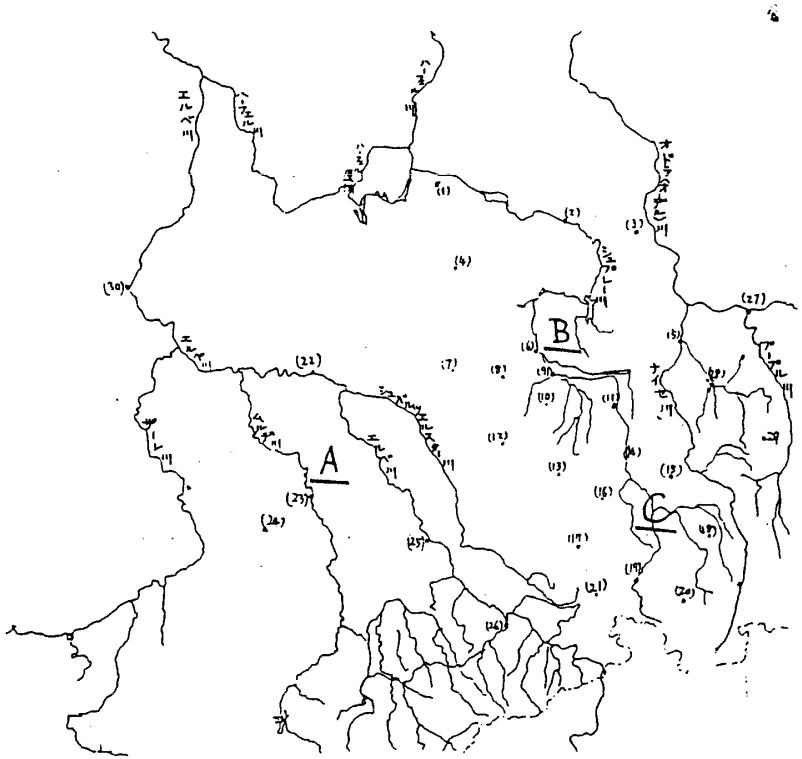
阿部謹也「刑吏の社会史」講談社学術文庫「ヨーロッパ中世の宇宙観」収録

フィヒテ「ドイツ国民に告ぐ」富野敬邦・森霊瑞訳　玉川大学　世界教育宝典

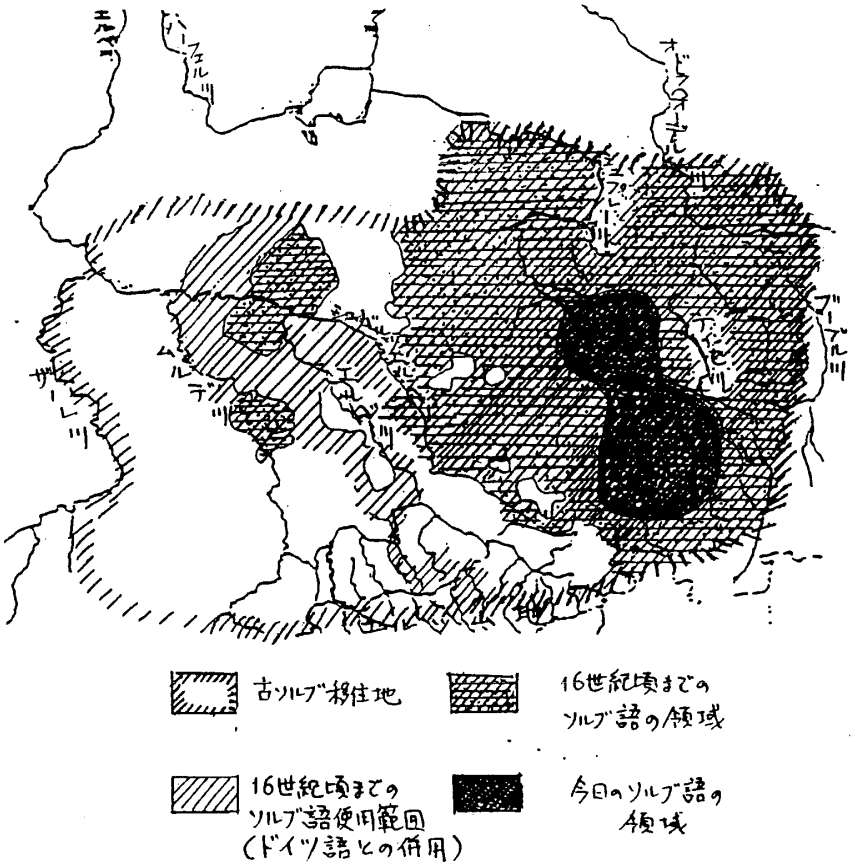
地図1　ドイツ東部と*sьrbъ/*sьrbъのヴァリアントの分布

A: Sorb　B: Sarb　C:Serb が現われる

(Schuster-Sewc 1983:145; 1985:852)



1.Berlin	2. Fürstenwalde	3. Frankfurt a.d.Oder	4. Zossen	5. Gubin
6. Lübben	7. Dahme	8. Luckau	9. Lubbenau	10. Calau
11. Cottbus	12. Finsterwalde	13. Senftenberg	14. Spremberg	15. Weißwasser
16. Hoyerswerda	17. Kamenz	18 Niesky	19. Bautzen	20. Löbau
21 Bischofswerda	22. Wittenberg	23. Eilenberg	24. Leipzig	25. Riesa
26. Dresden	27. Krosno	28. Lubsko	29. Zary	30 Magdeburg

地図2　ソルブ語の使用領域

この図版はSolta (1976:39)およびFaßke (1991:33)をもとに作成した。